



金子元臣著

枕草子評釋

東京 明治書院

枕草子評釋全二冊

定價各金四圓

大正十年六月廿一日印刷
大正十年六月廿六日發行
大正十四年九月廿五版

著者 金子元臣

東京市小石川區白山御殿町百十番地

發行者 三樹一平

東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者 竹內喜太郎

東京市牛込區榎町七番地

印刷所 日清印刷株式會社

發行所

東京市神田區錦町一丁目
振替貯金口座東京四九二番

株式會社 明治書院

電話大手五八四五番・六八六九番



枕草子評釋上巻目次

一段	春は曙	一
二段	頃は△	六
三段	正月一日は	七
	七日は	七
	八日	一三
	十五日は	一三
	除目のほど	一七
	三月三日は	二〇
	祭頃は	二二
四段	ことゝなるもの△	二八
五段	思はむ子を	二九
六段	大進生昌が家に	三三
	姫宮の御方の	四四
	中間なる折	四七
七段	うへにさぶらふ御猫	五〇

八段	正月一日三月三日は	六四
九段	よろこび奏する	六七
一〇段	今内裏の東をば	六八
一段	山は△	七一
二段	峯は△	七六
三段	原は△	七六
四段	市は△	七七
五段	淵は△	七九
六段	海は△	八〇
七段	わたりは△	八一
八段	みさゝぎは△	八一
九段	家は△	八二
一〇段	清涼殿の長の隅の△	八四
一段	すさまじきもの△	一一一
二段	たゆまるゝもの△	一二九
三段	人にあなづらるゝもの△	一三〇
四段	にくきもの(上)△	一三一〇

二五段	にくきもの(下).....	一四四
二六段	小一條院をば.....	一五六
二七段	心ときめきするもの△.....	一六一
二八段	すぎにし方戀しきもの△.....	一六三
二九段	こゝろゆくもの△.....	一六四
三〇段	檳榔毛は.....	一六八
三〇段	説経師は.....	一七二
	たふとき事.....	一七三
	そこに説経しつ.....	一八一
三一段	菩提といふ寺に.....	一八四
三二段	小白河といふ所に.....	一八六
三三段	七月ばかり.....	二〇六
三四段	木の花は△.....	二一五
三五段	池は△.....	二二三
三六段	せちは△.....	二二六
三七段	木は△.....	二三三
三八段	鳥は△.....	二四三
三九段	あてなるもの△.....	二五一
四〇段	蟲は△.....	二五三
四一段	七月ばかりに.....	二五七
四二段	にげなきもの△.....	二五七
四三段	細殿に.....	二六三
	月夜にむな草.....	二六四
四四段	主殿司こそ.....	二六五
四五段	職の御曹司の西おもて.....	二六七
四六段	殿上の名だいめん.....	二八二
四七段	若くてよろしき男の.....	二八七
四八段	若き人とちごは.....	二八九
四九段	人の家の前を.....	二九三
五〇段	瀧は△.....	二九七
五一段	川は△.....	二九八
五二段	橋は△.....	三〇一
五三段	里は△.....	三〇二
五四段	草は△.....	三〇四

五五段	集は△	三〇九
五六段	歌の題は△	三一〇
五七段	草の花は△	三一〇
五八段	おぼつかなきもの△	三一八
五九段	たとしへなきもの△	三二〇
六〇段	忍びたる處にては	三二一
六一段	懸想人にてきたるは	三二三
六二段	ありがたきもの△	三二六
六三段	うちの局は	三二九
六四段	職の御曹司におはします頃木立など	三四〇
六五段	あぢきなきもの△	三四五
六六段	いとほしげなるもの△	三四七
六七段	心ちよげなるもの△	三四八
六八段	とりもてるもの△	三四九
六九段	御佛名のあした	三五〇
七〇段	頭中將の	三五五
七一段	かへる年の	三七七
七二段	里にまかでたるに	三九三

七三段	物の哀しらせ顔なるもの△	四〇三
七四段	さてその左衛門の陣に	四〇三
七五段	職の御曹司におはします頃西の廂に	四〇六
七六段	めでたきもの△	四三八
七七段	なまめかしきもの△	四五〇
七八段	宮の五節いださせ給ふに	四五七
七九段	無名といふ琵琶の御琴を	四七七
八〇段	上の御局のみすの前にて	四八一
八一段	御めのとの大輔の	四八四
八二段	ねたきもの△	四八六
八三段	かたはら痛きもの△	四九三
八四段	あさましきもの△	四九五
八五段	くちをしきもの△	四九七
八六段	五月の御さうじの程	五〇〇
八七段	御かたゝ	五二七
八八段	中納言殿参らせ給ひて	五三〇
八九段	雨のうちはへ降る頃	五三三

○注意

△の印あるは原本に見ゆる題目なり

挿畫目錄

貴紳室内・同室外(源氏物語繪卷).....	口繪	鏡、鏡臺.....	五
宮城・禁中の圖.....		荒海の障子.....	五
清涼殿の圖.....		夾算.....	一〇〇
殿上の間・職御曹司・弘徽殿の圖.....		結文、立文.....	一二三
寢殿造の圖.....		藥玉、卯槌.....	一三三
男女装束の圖(その一).....		一條院の圖.....	一五七
男女装束の圖(その二).....		遣水に髪を洗ふ(扇面古寫經).....	一六三
男女装束の圖(その三).....		二葉葵.....	一六三
男女装束の圖(その四).....		雙六.....	一六六
葱花輦・櫓椰毛車の圖.....		壺装束.....	一八三
網代車・女房車の圖.....		懸盤.....	一九〇
申文.....	(以下本文)	紫野附近の圖.....	二六
賀茂祭(年中行事繪卷).....	二六―二七	帳臺.....	三七
几帳.....	三六	附物(賀茂祭繪卷).....	三九
燈臺.....	四〇	行成の書.....	三三
折敷、高坏.....	四五	浅沓、深沓.....	三六
		小弓.....	二九四
		尻挿.....	二九五
		細殿(承安五節繪卷).....	三三二
		貴人管絃(餓鬼草子).....	三五三
		梅壺の圖.....	三七八
		臺盤.....	三九五
		枝に物を附くる.....	四二一
		かつけ物.....	四二三
		願文.....	四四四
		朽木形.....	四五三
		火取.....	四五五
		舞姫參上(承安五節繪卷).....	四五九
		常寧殿帳臺の試(雲圖抄).....	四六三
		釵子、簪.....	四六九
		蝙蝠扇、檜扇、柏扇.....	五三一

枕草子評釋上卷

金子元臣 著

一段

(口釋)
春は曙が、ことに面白。段々とはつきりして行く山際が、すこしあかるんで、そこに紫ばんだ雲が、細く靡いたのは面白い。夏は夜が、ことに面白い。月のある時分は、面白いこといふまでもなく、暗夜の時分も、やはり、螢が飛んで入亂れたのが面白い。雨などが降るのまでも面白い。秋は夕方、ことに面白い。夕日

春は曙^{あけぼの}。やう／＼しろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫^{むら}たちたる雲のほそくたなびきたる。夏はよる。月の頃はさらなり、闇^{くら}もなほ、螢^{ひかり}飛びちがひたる。雨などのふるさへをかし。秋は夕ぐれ。夕日はなやかにさして、山のはいと近くなりたるに、烏^{からす}のねどころへゆくとして、三つ四つ二つなど、飛びゆくさへあはれなり。まいて、雁^{かり}などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風のおと蟲のねなど、いとあはれなり。冬はつとめて。雪のふりたるは、いふべきにもあらず、霜などのいとしろく、又、さらでもないと寒きに、火などいそぎおこして、炭^{すす}もてわたるも、いとつき／＼し。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭^{すす}櫃^び、火桶^{ひき}の火も、白き灰^{はい}がちになりぬるはわろし。

が花々しく照つて、それが、山の端にひどく近くなつたの

に、夕鳥の啼へゆくというて、三羽、四羽、二羽と、空を飛んでゆくのも、興味がある。まして、そんな鳥などは違つて、雁などの列を作つたのが、大層小さく空に見えるのは、甚だ面白い。日が入りきつてしまつて、耳につく風の音や蟲の聲などは、甚だ興味がある。冬は早朝が、ことに面白い。朝、雪の降つたのは、面白いといひ立てるまでもない。霜などがひどく降つて、大層白いのに、又さうでなくとも、大層寒いのに、火などを急いで熾して、炭を持つて、殿の内を通ふのも、甚だ似合はしい。朝は

(考異) ○冬はつとめて 原本つとめての四字なし。光本、一本によりて補ふ。 ○いと寒きに 原本に文字なし。光本、

一本によりて補ふ。
曙 ○春は曙 春の頃は、一日の中には、曙が最も面白しと也。「曙」の下、をかしを略けり。○をかし 興あるをいふ。面白しと同じ。○しろくなりゆく山ぎは ハツキリしてくる山際がとなり。夜の明けて、山の輪廓の明になるをいふ。「しろく」は著くの意なり。諸註、白くと解けるも聞えぬにはあらねど、甚だ明確を缺く。又「しろくなりゆく」にて、句を切る説もあれど、さては、何が白くなりゆくにか、主格不明なり。夜がといふ主語を補へば聞ゆれど、本文のまゝにて、その意の通ずるには及かじ。○あかりて 明りてと也。但こゝは赤む意と見るべし。○紫だちたる 紫は、今いふ紫よりは赤味勝にて、所謂古代紫なり。明方の雲にはよく見ゆる色なり。「だち」はその氣の發つをいふ意の接尾語。○たなびきたる 棚引きたるがをかしと也。「たなびく」は靡くと同じ。「た」は接頭語。○夏はよる の下、をかしを略けり。○月の頃はさらなり 月のある頃のをかしきはいふも更なりと也。○闇もなほ 「なほ」は俗言のヤ、ハリと同じ。そのうへにの意にあらず。注意すべし。○飛びちがひたる の下、をかしを略けり。○雨などのふるさへ 雨は心地よからぬものなるに、夏の夜は、その雨などの降るのまでが面白しと也。「さへ」は副の義にて、物の一つある上に今一つ重ぬるに用ゐる辭。俗言のマデモと同じ。○秋は夕ぐれの下、をかしを略けり。○花やかに 花々しの副詞格。美しく鮮やかなるをいふ。○山の端いと近くなりたるに 夕日の入らんとして、山際に甚だ近づきたるをいふ。これを、秋の氣澄みて花やかなる夕日に、常よりも山の端の近く見ゆる意と解けるもあれど、迂遠なり。○いと 甚だと同じ。○ねどころへゆくとて 啼へ急ぐとてと也。○あはれなり 面白き事にもあれ、悲しき事にもあれ、凡て感の深きをいふ。こゝは興味のある意なり。○まいて ましての音便。○つらねたる 「つらね」は列をなすをいふ。○い

こんなによいが、晝
になつて寒氣が温ん
でゆくと、炭櫃や火
桶の火も構ひ手がな
くなつて、白い灰勝
になつてしまふのは
いけない。

とちひさく見ゆる 遠く高く行く様なり。○日入りはて、風のおと蟲のね 秋の夕、物の見えすなりて
より聞ゆる風の音や蟲の鳴く聲なり。「蟲のね」の下、など聞ゆるを略けり。○冬はつとめて の下、をか
しを略けり。○つとめて 早朝をいふ。又、翌朝の意に用ゐる場合、この草子中にいと多し。こ、は前
の意。「つ」とは夙^つにと同語。○いふべきにもあらず をかしといふべきにもあらずの略。冬の朝雪の降
りたるは、面白きが當然にて、いふに及ばずと也。○さらでも さあらでもの略。「さ」は雪霜などの降
るをさす。○炭もてわたる 炭を持ちて彼方此方へ行くもと也。「もて」は持ちて也。こは炭斗^{すすと}に入れて
運べるにて、落窪物語にも、炭斗のこと見ゆ。○つきなくし 似合はしきこと、相應すること。俗のツ
キ、ガ、ヨイにあたる。○ぬるくゆるびもて行けば 寒氣の温く和らび行くをいふ。「もてゆく」は、次第に
進み行くの意。○火桶 火櫃^{ひびつ}の圓きもの、即ち圓火鉢なり。桐のくり抜きにて、内を眞鍮などにて張り、
胴を箔にてだみ、彩色繪を描きたり。數寄を凝したるには、沈の木などにて造れるもあり。下文に見え
たり。○炭櫃 スピツ。すみびつの略。圍爐裏なり。禁秘抄に、禁中殿上^{てんじやう}の下侍に炭櫃ありて、四面
には疊を敷くこと見えたり。○火も の下、構ふ者もなくてを補ひて聞くべし。

譯

我々日本人ぐる、自然といふものに對しての、深い憧憬をもつてゐる民族は、他に恐らくあるまい。我
々の祖先の生活は、自然に支配され、時に盲従してゐる。それ故我々の有する文學美術には、自然を目的と
して、その美を發揮することを助けたものが、頗る多い。よし目的とせぬまでも、自然を背景とせぬもの
は、殆どない。だからわが文學美術から、自然を切離して見ることは、到底不可能なことである。かうした
國民性をもつた我々の祖先が、動もすれば、四季の風物をいひ、花鳥風月を歌つたのは、蓋し當然である。

四季の風物に對しての好惡は、甚だ複雑な聯感が伴うものであるが、直覺的には、皮膚の刺激に本づ
くことが、その大部分であるから、春秋二季は、ことに快的な時節と認められ、つひにこの二季の優劣

は、人々の口頭語となり、詞人がその才藻をきそふ好題目となつた。神代における春山の霞男と、秋山の下比男の競争、近江朝の春山萬花の妍、秋山千葉の彩の優劣からはじめて、平安朝に貫之が「錦をける秋の木の葉」、孝標の女が「おぼろに見ゆる春の月」など、或は春に肩を入れたり、或は秋に心を寄せたりして、彫心鏤骨、詩壇の一佳典を作るやうになつた。けれど、一派の詞人は、四季おのゝ、特色があり、好處があることを認めて、頗る公平な見地から、その推稱をおこたらなかつた。すなはち平等に、四季の景趣を叙したものには、この草子以前に空穂物語があり、同時に源氏物語があり、後世には徒然草がある。中にも傑出したのを、この文とする。蓋し清少一流の敏警な觀察と、引締つた歯ぎれのよい筆致とは、とても他の真似の出来ない所で、實にわが國文中の異色である。

やわらかい輪廓をつくつた東山の峯に、ほの／＼と別れてゆく横雲の空は、京うまれの清少が、幼少から見馴れて、印象ふかく感じた景色であらう。また雨に對する厭惡の念が、今の我々の想像以上に強かつた當時において、「雨などの降るさへをかし」と道破したのは、よく時代を超越して、自然の趣味を解したものである。「三つ四つ二つ」の辭様の參差は、雁のまばらに飛んでゆく狀を形容し得ておもしろい。「ちひさく見ゆる」は、雁が山とび越えて去來する光景で、京都の地勢上、常にあり勝なことである。稀にはひくく飛ぶこともあらうが、下文にも「雁の聲は、遠く聞えたるをかし」といつてるのを見ると、それは清少の嗜好に適はなかつたものだらう。否恐らくは、近い雁に、詩味を感じ得るほどの機會と經驗をもたなかつたのだらうと、推察される。「火など急きおこす」に、寒氣を怖れた趣が現れてゐる。「炭もてわたる」は、彼方此方の火桶炭櫃に、女官達が、炭つぎ廻るさまであらう。小大君集に、殿上に、炭もてくる男を、おそく参りたりとて、藏人のとらへて、髪に繩をゆひ付けて、宥さぐりしかば、女房方よりよみてやる。

おほはらや炭のかしらの繩ゆるせこのめに涙うかぶといふなり

これによると、當時の禁中御用の炭は、大原の炭竈から、ぢかに上納したものと見える。納入の時期がおくれたとて、その炭焼の長を折檻するのは、甚しい亂暴のやうだが、まことに炭なしには、片時も居られぬから、仕方がない。天井はなし、大間にはあり、四方かけ拂にはあり、日あたりもとかく不十分な當時の殿舎では、寒さはさこそと思ひやられる。そこで、火おこすも、炭もてわたるも、頗る有意味な譯となつて、つきふしくも、をかしくも感ぜられるのである。

時刻を四季に配當して、その特色を紹介したこの企は、空前の新案である。さて春は曙、夏はよる、秋は夕ぐれ、冬は早朝の四綱目がまづ出来て、次にその細説を試みるに當つて、春、夏、秋は、専ら叙景につとめ、冬には人事を配して、内容に變化あらしめ、また春、夏を輕々に評し去つて、秋冬に力をそ、ぎ、また春、夏、秋は、専らその好處をのみ舉げ、冬には「晝になつて——わろし」と、即損の轉語を下したなど、筆法が變化に富んで、まことに面白い。しかも文の様式が整然として、その結構から布置から、一寸のたるみも無い。初學者の模範を取るには、最も都合のよい文體の一つであらう。

殊に注意すべきは、春の曙と秋の夕暮とである。この文が一度世に出てから、この二つは、吟詠の好題目となつて、千載の今もなほ、歌人の口の端に乗つてゐる。以てその觀察が、たゞ奇警といふばかりでなく、極めて妥當であることが證明される。

この草子全體にわたつて、省筆略筆が、極めて多い。時には却つて、文意の晦澁をきたす嫌もないでは無いが、文字が簡淨で、調子が勁健な所以も、全くこゝに存する。この草子が、文章的に成功した理由は多端であるが、省略法もたしかに、その一因を成したことは争へない。又活用語の第四變化の省略法を疊用したのは、文の簡潔を助ける所以である。婦人の文字、おのづから歇後の口語的傾向を帶び勝

な結果であらう。

二段

ころは 正月、三月、四五月、七月、八九月、十一月、十二月、すべてをりにつけつゝ、
ひととせ
 一年ながらをかし。

(考異) ○十一月 原本十月とあり。一本、活本による。

【釋】 ○ころは 一年のうちにて面白き頃^{とき}はと也。○つけつゝ、「つゝ」は動作の繼續を示す辭。○一年なが
 ら「ながら」は悉^{すべて}皆の意。

【評】 二月、六月、十月をば書いたのは、煩を避けたのではない。いづれも間の月で、自然なり、人事なりの興
 趣が、稍うすい心地がするからである。とはいへ、實は一年中みなをかしと、頓挫したところが面白い。
 「折につけつゝ」は、この眼目である。藤原忠良が「折にあへばこれもさすがにあはれなり」と、小田の
 蛙の夕ぐれの聲をうたひ、『兼好法師が「をりに觸れば何かはあはれならざらむ」と、そのつれづれに書
 いたのは、これに共鳴した思想である。わづか一二行の文字ながら、叙法の錯落と句法の變化とは、姿
 態横生の觀がある。

前段季節を評し、この段月次を評し、次段以下節目を叙してゐる。筆法粗から精に、大から細に入つ
 てくる。

三段

【釋】
 面白い季節は 正月、
 三月、四五月、七月、
 八九月、十一月、十二
 月であるが、總體そ
 の季節につけつゝし
 て、一年中面白い。

(口譯)

正月は、すべて結構な月であるが、その元日はまして、空の氣色がうらゝかで、珍しく霞み渡つたのに、世の中にある限の人は、衣裳や化粧を、特別に注意して、めかし立て、君をもわが身をも、幾久しくと祝ひなどした有様は、格別に面白い。

(口譯)

正月七日は、雪の下から、早出の若菜を、青々と目覺しく摘み取つて、何時もは、さうそんな野菜などは目馴れない、御殿のあたりにも、もてはやしたのが面白い。

今日の禁中の白馬の御儀式を見ようと、里人達は、車を綺麗

正月一日は、まいて空のけしきうらくと、めづらしく霞みこめたるに、世にありとある人は、姿かたち、心ことにつくろひ、君をもわが身をも祝ひなどしたるさま、ことにをかし。

釋

正月一日 正月をむつ、きと訓む。睦月の略なりとも、萌月の約なりともいへり。一日をついたちと訓むは月立ちの音便にて、月の始る意。狹義には朔日をいひ、廣義には上旬をいふ。○うらくと うらくとしてと也。麗らかにと同じ。○ありとある人 あらゆる人なり。○姿かたち心ことに「姿」は衣形の義にて、衣裳附なり。かたちは容貌なり。美人をかたち人といへり。「心ことに」は用意格別となり。○君をもわが身をも祝ひ「君をも」は君をも祝ひの略。君を祝ふには、朝拜などして、祝意を表するもあるべく、身を祝ふには、齒固などして、年壽を祝するもあるべし。

七日は、雪間の若菜青やかにつみ出でつゝ、例はさしもさる物、目近からぬ所にもて騒ぐこそをかしけれ。白馬見むとて、里人は、車清げにしたてゝ見にゆく。中の御門のとじきみひき入るゝほど、かしらども一とこゝろにまろびあひて、刺櫛も落ち、用意せねば折れなどして、笑ふも亦をかし。左衛門の陣などに、殿上人あまた立ちなどして、舍人の弓ども取りて、馬ども驚かして笑ふを、はつかに見入れたれば、立並などの見ゆるに、主殿司、女官などの、行きちがひたるこそをかしけれ。いかばかりなる人、九重をかく立ちならすらむなど思ひやらるゝに、うちにも、見るはい

のちを、かう物馴
れて振舞ふことであ
らうなど、羨しく思
ひ遣られるに、禁中
でも、今見わたす所
はせまい範圍で、晴
のお化粧をした舍人
の顔の生地もあらは
に見え、白粉のゆき
渡らぬ所は、ほんに、
黒い庭に雪が斑に残
つたやうな心持がし
て、甚だ醜い。何に
せよ、馬がはれ上つ
て騒いで居るのも、
恐しく思はれるの
で、車の内へ引込ま
れて、よくも見て居
られない。

次白馬七疋、次左右允、次白馬七疋、次左右屬、次白馬七疋、次左右助、次右近衛舍人等渡畢」と見ゆ。○里人 サトビト。「里」とは宮城外をいふ。都を大君の御里と、歌にもよめり。そこに住居せる、身分ある人の家族を里人といふ。○車 車は牛車にて、當時上中流人の乗物なり。種類多し。文中處々に散見せり。委しくは一々そこにて叙ぶべし。(附圖參照) ○清けにしたて、「清け」のけは、様子を示す接尾語。「したて」は繕ひての意。禁中に參るなれば飾り立つる也。○見に行く 白馬を見にゆくと也。○中の御門 待賢門のこと。内裏の東面の門にて、郁芳、陽明二門の間にあり。朱雀門は内裏の正門にして、南面の中の御門なれど、當時西の京は場末となりて、東の京のみ榮え、朝紳は、多く東面より出入せしかば、待賢門、獨この名を得たり。かくて、朱雀門と共に、重要な内裏の出入口となれり。○とじきみ 和名抄に「闔、門限也、和名シキミ、俗云トジキミ」とありて、門の親柱の間にわたせる、下の横木をいふ。○ひき入る、車を挽き入る、と也。○かしらども 一とこにまろびあひ 車の動搖烈しくて、乗合へる婦人達の鉢合するをいふ。「ども」は復數を示す接尾語。「まろびあひ」はころびあひ也。○刺櫛 サシグシ。この頃は、額に櫛をさしたる也。この櫛は、梳の用にはあらで、飾の爲なり。大寶の令制に、三位以上、象牙の櫛を許さる、こと見えたり。おもふに、清少等のは木櫛なるべし。○用意せねば 覺悟せねばと也。○笑ふも亦をかし 若菜も白馬の節會も面白きに、かく車にゆられて鉢合して笑ふも、亦面白しと也。○左衛門の陣 サエモノデン。建春門にあり。この門は、禁中中重の東門にて、門の外面の南側に陣屋あり。衛門府、及び陣を見よ。妙音院相國、白馬節會次第に「從大庭渡、左衛門陣前、達於陽明門」と見えれば、清少は、白馬がこの陣の前を渡るを見んとて、待賢門に入りて、左衛門の陣の邊に待構へ居たるなるべし。○衛門府 エモンフ。靱負の府ともいふ。宮城の外門を守る職なり。左右あり。督各一人、(從四位下) 佐各一人、(從五位上) 大尉各二人、(從六位下) 少尉各二

人、(正七位上)次に多少志あり。門部二百人を統ぶ。○陣　ヂン。役所なり。貞丈雜記に「禁裏にて、役人出仕して、役所に列座すること、著陣といふ。陣は役所といふ心なり。陣は列ると訓む字にて、人々多く立列るをいふ」。○殿上人　テンジヤウビト。又、へびともいふ。清涼殿の殿上の間に昇るを聽かれたる人の稱。四位五位は勿論、公卿にても、許さる、者と許されぬ者とあり。六位にても、藏人は昇殿す。許さる、を「うへゆるさる」といふ。日給簡ありて、殿上人の名を記して、殿上に懸けた。これを仙籍といふ。この簡に記さる、を簡につくといふ。若し過失ある時は、この簡を削らる。殿上を見よ。(附圖清涼殿、殿上の間参照)○舍人　トネリ。殿侍り、又殿寮人の義とぞ。もと貴人は奉仕して、雜役を勤むる者の稱なりき。こは近衛府の舍人にして、左右近衛に、各三百人ありて、弓箭兵仗を帶す。位階ある者の子弟、及び勳位ある者を選抜して採用す。將曹、府生、番長は、これより選任す。近衛府を見よ。白馬の節會には、馬の前に立ちて行く。白馬を參看せよ。○弓ども取りて、舍人の持てる弓などを、見物する殿上人達がたはむれに取れる也。○馬ども驚して　弓にて馬を打驚してと也。○はつかに見入れたれば　殿上人達のふざけ居るを、門外よりわづかに覗き見たればと也。「はつかに」は僅に同じ。「見入れ」は見込むこと。○立部　タテジトミ。部の如く造りて、目隠しに庭に立つる屏。造り付けにも、取外しにも造る。この立部は、宣陽門内、溫明殿の前のなり。部を見よ。(附圖参照)○ともし司　後宮十二司の一にて、男官の主殿寮の如く、殿中の燈油、薪炭等の事を司る。尙殿一人、典殿二人、女孀六人(後には十二人)あり。女の奉公人中のよき役柄にて、禁秘抄にも、「主殿司美麗姿也、公人内可稱神妙之職」と見えたり。○女官　ニヨウクワン。禁中名目抄に「女公人之惣名也」と註し、岷江入楚には「内侍、命婦、藏人をニヨクワン、以下の下藤をニヨウクワンと引いて唱ふべし」といへり。○行きちがひたる　こは溫明殿の簀子あたりを、殿司や女官等の往復するが、立部のはづれ